



AGULI

Aoyama Gakuin University Library Information

青山学院大学図書館報

特集 図書館での出会い

No.86

<http://www.agulin.aoyama.ac.jp/>

November 1, 2009



目次

巻頭エッセイ

Persistence of Memory 西尾 泉 2~3

特集「図書館での出会い」..... 4~13

[データベース紹介]

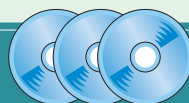
CiNii (サイニイ) NII 論文情報ナビゲータを
使って日本語論文を探そう 14~15

図書館広報板 16

特集「図書館での出会い」

人生を決めた出会い.....	日置 俊次	4
図書館と魔法使い.....	薬師神玲子	5
図書館で数字を読もう.....	白須 洋子	6
ここの一冊.....	楊 林凱	7
図書館での再会.....	永井 忠孝	8
「学びの志」をくれた、書物のない図書館.....	猿橋 順子	9
様々な出会いの場としての図書館.....	外林 秀之	10
『図書館と漫画』.....	福田 亘孝	11
映画『Love Letter』の図書室.....	入不二基義	12
大学図書館は知のシンボル.....	小西 範幸	13

Persistence of Memory



万代記念図書館長 西 尾 泉

NISHIO Izumi

しばらく前に、修士論文をCD-ROMの形で図書館に保存するのでPDFに変換して各研究室ごとにまとめてCD-Rに焼いて提出するからとコース教務主任から連絡があって、CD-Rに焼いた記憶がある。しかし伊ザ提出の段になって、この話は立ち消えになった記憶が在り、また最近大学院のコース教務主任会議で、あるコースの教務主任（これは一専攻多コースの理工学専攻の特殊な役職かもしれない）から「あれはどうなったのか?」という趣旨の発言があった。最近のCD-RやDVD-R、ブルーレイディスク等の発展は目覚しく、その容量も数百メガバイト（M Byte- 10^6 バイト）から数十ギガ（G Byte- 10^9 バイト）へと目覚しい勢いで延びていっている。またハードディスク（以下HDD）は1万円も出せば1テラバイト（TByte- 10^{12} バイト）のHDDを手に入れることが出来る。この容量に比べれば修士論文などは大量の写真や特殊な図が多く入っていない限り、高々数メガバイトにしかすぎない。したがって、修士論文を記録媒体に保存することは至極簡単なことのように思える。我々の研究室の書架の1～数段を占めている卒業研究論文や修士論文、数冊の博士論文の全てが、たった1枚のDVDに入ってしまう計算である。1T-ByteのHDDに至っては、これから先定年までの全ての論文を入れても十分すぎるくらいの容量である。

しかし、これらの記録（記憶）媒体は有限の寿命を、しかも数年から長くて数十年の寿命しか持っていないことも皆様、御承知のことであろう。CD-RやDVD-R等は直射日光に当

てれば数日で読み出せなくなってしまう。したがって、これらの記録媒体は何時かは読み出せなくなってしまうわけである。最近流行のSSD（Solid State Disk）やUSBメモリーに入っているフラッシュメモリーも1個のメモリーセルの書き換え回数は10万回程度と言われている、HDDより長いかもしれないが、有限の寿命を持っている。もちろんハードディスクはレイド（RAID: Redundant Arrays of Independent Disks）を組む（簡単に言えば多重化する）ことによって一台のディスクが壊れても、新しいHDDを買ってくれば、また多重化されて、安全に情報をしまっておくことが出来る。このことはまた皆様、良く御承知のことであろう。しかし、それは、毎年十分な手間と金額をつぎこむことが前提であることもまた事実である。私の研究室でも数年前からレイド（RAID1）を組んで、100G（その当時は大容量）のファイルサーバーを運用してきた。しかももう一台のバックアップ用のHDDに時々圧縮して保存を繰り返してきている。ところが今年の夏の停電からそのファイルサーバーが立ち上がってくれなくなってしまう、やっとバックアップのHDDだけは無事であったというお粗末な事態に陥ってしまった。この停電（回転の停止）からの復旧は、古いHDDには厳しいことであり、一端止まったHDDが再び立ち上がらなくなる場合があることは、御経験のある方も少なくないと思う。これを復旧しようと、秋葉原をうろつき回ったところ、分かっていたこととはいえ、我々が使っていたPATA（古いHDDの規格、現

在はSATAが主流でPATAは生産中止)のHDDはもうほとんど入手が困難になりつつあり、おかげで安いNASを買って急場を凌いだわけである。ビデオも然りであり、 β (憶えていますか?) や、現在ではVHSのテープの膨大なライブラリーを持っていたも、もちろん経年劣化もおこるが、再生装置自体が手に入らなくなってしまっていることも笑い話では無くなっている。またこの他に8インチ(秋葉原の怪しげな店ではまだ売っています。)や5インチのフロッピーディスク、Zipディスク(調べたらまだ現役で売っていました。)などいつのまにか消えていった(いきそうな)媒体も少なくない。したがって、このような媒体は、VHSをDVDに、DVDを??(未来の何か)にと次々にコピーを繰り返していかないと生き残れない媒体である。



失われた記憶たち

長々とつまらないことを書いてきたが、言いたいことは紙媒体の偉大な耐久年数とアクセスの容易さ(見れば良い、読み出しの装置は必要ない)のことである。もっとも、万代記念図書館書庫のようにカビが生えてしまっは論外と言われるかもしれないが…。パピルス、羊皮紙や粘土板や石に刻まれた文字や絵をこれに含めれば(ラスコーの壁画などは現代人の前のクロマニオン人が描いたものであるから、1万年以上前のもの)1万年以上前

の情報が残っていることになる。紙媒体に限っても2000年以上前の前漢の地図が知られている(白状すると、今Wikipediaで調べた。現代の技術万歳)。

これに比べればCD-ROMの寿命でさえ百分の1(CD-Rに至っては下手をすると千分の1以下)に満たない。たぶん、このようなことを考えて、修士論文のCD-R化は、十分な予算の手当と情報科学研究センターとの連携(RAIDシステムの構築と維持運営管理組織等)が出来るまでお預けとなったものと推察される。しかしながら、この偉大な耐久年数を誇る紙媒体は、利用の容易さと言う点においては、電子媒体に遥かに劣ることはまた自明の事であろう。借りに行った本が貸し出し中で待たされた経験も少なくないであろうし、第一に冊数が少ない貴重なものも少なくない。したがって、紙媒体と電子媒体は、お互いの長所、短所を持っており、これからはお互いに補いあって行くべきものであろう。ここで例として取り上げた修士論文(博士論文は国会図書館に保存されているから別扱いとして)の保存や、著作者の許可のあるものの発表や発信はまた本館や理工学部のある相模原キャンパスにある万代記念図書館の大切な使命でもあると考えられる。したがって、いずれの日にか、皆様に研究室的修士論文を電子媒体として提出していただく日が来ること、そのような体制が出来ることを望んで(またその方向で努力することを決意しつつ)この駄文を終わりにしたい。付け加えれば、本学図書館が所蔵している貴重な文献も、紙媒体としての保存は図書館としての重要な役割であるが、何時の日か、スキャンするなどして、電子媒体として広く一般に公開して使用していただくことも図書館の重要な役割の一つであろう。

(理工学部物理・数理学科教授 高分子物理、生体物理)

人生を決めた出会い

日 置 俊 次

HIOKI Shunji

私は特に読書が好きな子供ではありませんでした。岐阜県の片田舎で、地元の公立中学から公立高校に何ごともなく進学しました。しかし高校1年生になると、私は学校の小さな図書室に通い始めました。まるで恋人のものと通うように、暇があれば通い続けました。この平凡な図書室で、ある出会いがあったというしかありません。いま私が東京で教壇に立っているのは、その出会いがあったからです。そこで私が出会ったのは、謎めいた装幀をほどこされたある厚い個人全集でした。

すこし唐突ですが、ここでしばらく岩波茂雄という人物にまつわる話をしておきたいと思います。彼は長野の諏訪の人です。上京して一高を卒業しましたが、故郷に戻って田畑を売りました。その資金をもち、朝日を浴びる八ヶ岳を見上げつつ、再び上京したといいます。彼は、大正2年、神田神保町に古本屋を開きます。これが岩波書店です。翌年、大正3年に夏目漱石の『こゝろ』を刊行し、出版業に進出しました。漱石は当時大作家でした。無名の古本屋が漱石の作品を出版するのは、異例のことです。「朝日新聞」連載の『こゝろ』に感動した岩波茂雄は、漱石に会って、涙ながらに出版を懇願しました。意気に感じた漱石がとうとう了承すると、彼は「出版費用も出してください」と言ったそうです。なんと漱石は、その申し出も引き受けました。

『こゝろ』は、岩波書店刊と名のついた、漱石の自費出版でした。漱石は本の装幀も自分で引き受けたのです。『こゝろ』の装幀は、斬新なオレンジ色の地に漢字の文様が入ってい

て、深みのある魅力的なデザインです。これは周の岐陽の「石鼓文」といわれるものです。中国にいた橋口貢が漱石に送った拓本の文字を使ったといえます。

漱石は大正5年に亡くなります。岩波書店は『こゝろ』の装幀を用いて、『漱石全集』を刊行しました。この『漱石全集』の人气によって、岩波書店は飛躍するのです。

いってみれば岩波版『漱石全集』は、漱石自装であるということになります。私が高校の小さな図書室で出会ったのは、棚に並ぶこのオレンジ色の『漱石全集』でした。

後に上京することになる私も、『漱石全集』の背後にあるドラマを知りませんでした。ただ謎のような装幀に惹かれて、読み始めたのです。この全集は漢字にルビがふってあるので高校生でも読めました。『吾輩は猫である』も難しい小説ですが、例えば苦沙弥先生の食事風景を滑稽に描く部分では、私がいま一つまでもクスクス笑っているのです。図書室にいた先生が駆け寄ってきて、大丈夫かと聞きました。

毎日手に取っていると、本が体に馴染んできます。漱石を読む生徒がいるということは、先生方の話題にもなったらしいのです。国語の先生でも、『漱石全集』をきちんと読んでいる人はいませんでした。先生たちの私を見る目が変わってきたのを感じました。こうして『漱石全集』を読破した体験は、次第に揺るぎない自信となり、その後の私の人生を支えてくれることになったのです。

(文学部日本文学科教授 日本近代文学)

図書館と魔法使い

薬師 神 玲子

YAKUSIJIN Reiko

高校時代の同級生 M 君は、司書だ。地元千葉県で、市立図書館に勤めている。未だに MEN'S NON-NO を愛読しているギタリストの彼は、児童書室担当で、勤務日には天然パーマの長髪をルーズに結わえ、赤いギンガムのエプロン姿で「お話のお兄さん」もしているらしい。別の同級生から「お話の小父さんだろ?」と突っ込まれてはいたが、想像するに、妙に似合っていて、笑ってしまう。本人も児童書室が気に入っているらしく、天職だよね、などと宣わっているから、人間わからない。

私たちが小さいときには、まだ近所の図書館に「お話のお兄さん」制度は導入されておらず、初めてお目見えしたときには、残念ながら、疾うに企画の対象年齢を超えてしまっていた。M 君のような、怪しげなお兄さん（小父さん?）が魔法使いの話など読んでくれた日には、眠れないほどワクワク出来ただろうに、と、今の子供達をうらやましく思う。中には、M 君を本当の魔法使いだと思う子いるかもしれない。いや、M 君の容貌では、そんな子が出ない方が不思議だ。

魔法使いの話は最近でも大人気らしいが、私も小さいとき、魔法話が好きだった。中でも、図書館で出会って、大のお気に入りになったのが、オトフリート・プロイスラーの『小さい魔女』だ。弱冠 127 歳の新米魔女が、相棒のカラスと一緒に、一人前の良い魔女を目指して奮闘する話である。この小さい魔女、カラスの「良い魔女とは、魔法で良いことをする魔女である」とのアドバイスを受けて、ひたすら人の役に立つ魔法を使おうと努力す

る。が、実はそのアドバイスが勘違い。先輩魔女から、「良い魔女とは、魔法で悪いことをする魔女である」と言われ、大きな罰を受けてしまう。最後は小さい魔女の大逆転で幕を閉じるというもので、考えてみれば、かなり教訓めいた話と言えなくもない。が、小さいときにはそんなことはおかまい無し。ただただ、自分と同様、失敗したり、だらけたり、風邪をひいたりする魔女の生活が可笑しくて、そして、彼女の使う可愛くてしかも実用的な魔法に魅せられて、何度も何度も、借りては読んだ。

それを思い出して、M 君に「ね、“小さい魔女”も、読む?」と聞いたら、「あったりまえさ。あれ、僕大好き」と言われた。やっぱりね。どう見ても、彼は小さい魔女派の魔法使いだ。もじゃもじゃ頭に、つぶらな瞳、そばかすだらけのニーッと笑った顔。ん?どこかで見たような... と思ったら、あ、ハリーポッター。なんだ、日本に潜伏していたのね。けれども、このハリーは、大それた魔法は使いそうもない。

図書館に魔法使いが居るのは、何も日本だけではないらしい。昨年度、在外研究で滞在したアメリカ・ニューヨーク州のロチェスター大学では、ハロウィーンの図書館に魔女が出没し、来館者に林檎を配ってくれた。この原稿を書きながら、美味しかった林檎の味を思い出し、やっぱりあれは本物の魔女だったに違いないと妙に納得した。

(教育人間科学部心理学科准教授 認知心理学)

図書館で数字を読もう

白 須 洋 子

SHIRASU Yoko

私の図書館との出会いは就職して間もなくの頃でした。当時私は政府系金融機関の予算部門におりました。政府系金融機関はお客様との窓口業務等を民間の銀行等に委託しており、その支払手数料の財源を政府に概算要求する時期でした。支払手数料というのは、実際に銀行が窓口業務等にかかったコスト相当分+アルファですが、このアルファが問題です。委託業務を効率よくキチンとやってもらうためのインセンティブでなくてはならないのです。そこで、各銀行の経営状況や効率性、委託業務への熱心さ等を客観的に正しく調べ・把握する必要があったのです。

皆さんご承知のとおり、最近ではディスクロージャー制度が整い、各銀行は自らの様々な情報を公開するようになりましたが、約20年前は未だ情報はクローズされている時代でした。なかなか銀行の経営状況等を詳しく知ることはできません。定例の決算報告では粗い情報しか判りませんから、せめて有価証券報告書レベルの情報を入手しました。しかし、現在のように電子媒体の有価証券報告書があるわけではありませんし、もちろんネットで配信されているわけでもありません。1冊(=1社)約1500円近くする本(有価証券報告書)を買わなければなりませんが、分析対象銀行等は150行近くあり且つ過去にも遡らなければなり、とても、そんな予算は企業にはありません。

そこで、思いついたのが、全国銀行協会の専門図書館の利用です。専門図書館には一般の図書館にない幅広い・貴重な資料がたくさんあります。私は、銀行等の経営状況を調べ

るために、各銀行が毎年発行している有価証券報告書から関連する数字を拾いまくりました。約2週間程、朝から晩まで図書館に籠もりきりになり、多くのファイルをひっくり返しては数字と格闘です。事前にどのような数字を拾う予定か決めていたのですが、よく見ると新たな疑問が次々と浮上し、それを解決するには別の数字も必要であることがわかり、1つの事実を知るために多くの数字のパズルを解いていったものでした。生の数字を追っているとまるで大きな風景画を見ているような気持ちになりました。数字の一つ一つに、今、将に活きている銀行の経営や経済全体の動き、銀行経営者の(惰性的or苦渋の)判断が透けて見えるような気さえました。現実の経済は動いて生きておりそれが結果として数字に反映されているということが感じられ、つまり一つの数字の持つ意味を味わうことができました。読者の方には、そんなやり方ではデータの信憑性は大丈夫か不安に思う人もいるでしょう(笑)が、もちろん、私が拾いパソコンに入力した数字(データ)を会社の同僚に確認してもらいましたよ。

私にとって図書館とは、今、将に動いている現実社会を、数字という客観的な情報を介することにより私に教えてくれた所です。図書館には活字のみではなく様々な情報があります。また、世の中と断絶された異次元空間ではなく、そこにある情報を上手く活用すれば、現実社会の息づかいが聞こえる、そんな空間でもあるのです。

(経済学部経済学科准教授 コーポレート・ファイナンス)

こころの一冊

楊 林 凱

YANG Linkai

図書館は新しい可能性を見いだせる貴重な知の宝庫である。

私は5年前に本学図書館で、とある一冊の書に会い、信託法の研究を始めた。その本は能見善久の『現代信託法』（有斐閣）であった。

信託ってナニと思う人が多いだろう。実に、日本の信託法は、86年前に、英国の信託法をモデルに作られ、経済社会に非常に役に立っている制度である（例えば、年金信託、貸付信託、投資信託、土地信託など、09年6月現在の信託財産残高が750兆円弱）。重要な財産制度なのに、一般に知られておらず、信託法はさみしがっているに違いない。ところが、条文的には難解だが、制度的にはおもしろい。『現代信託法』では、下記のように信託の興味深さとダイナミックな法理と実務の展開を分かりやすく紹介されているので是非一読していただきたい。

第1に、本書は、法解釈論と立法政策論の2つの視点から展開されるだけでなく、信託制度に内在する思想があることを強調された。その思想とは、1つは「信頼と誠実」であり、もう1つは「自由と創造性」である。「信頼と誠実」がfiduciaryの義務に立脚し、さらに「信頼」とそれに応える「誠実」が信託の基本思想である。他方、「自由と創造性」をめぐっては、社会・経済の発展のために既存の法制をリフォームする必要がある、法制度を整備する必要がある。近年、信託業法の

緩和、信託法の任意法規化が相次ぎ実現され、信託のさらなる発展が楽しみである。

第2に、本書は、信託＝財産処分モデル、信託＝契約モデルと信託＝制度モデルという3つの信託モデルを分類したことがユニークである。その中、信託＝制度モデルは、信託が法人と類似の機能を営み、会社よりは自由に設計できる点に特徴があると分析される。また、この3つのモデルは、あくまで理念型にすぎなく、中間型・融合型もあると述べられる。そして、英米と比較して、日本では、これからの方向性として民事信託の実践と商事信託の法理の発展を図ることが重要であると主張される。

第3に、本書は、信託の成立から変更ないし終了までのライフ・サイクルにわたって利害関係者の権利義務・責任、信託財産の帰属、変更、消滅などについて、外国法や民商法（引用文献や脚注等の情報量が豊富、勉強になる）との比較に踏まえ、設例・具体例を示しながら展開されている。また、信託制度自体が税制による制約を受けることは、ときに信託の姿をゆがめる危険がある。本書は、信託の視点からその税制が適当であるか否かについて批判的に概観された。

あれから早5年が経ち、図書館のお陰で私なりに信託のイメージが形成しつつある。今は、図書館のさらなる発展を願うばかりである。

（法学部法学科助教 商法）

図書館での再会

永井 忠孝

NAGAI Tadataka

私はアラスカのエスキモー語を研究しています。初めてエスキモーの村に行ったのは修士二年の時で、アンブラーという小さな村に三ヶ月滞在しました。村ではふだん英語しか耳にする機会がありませんから、エスキモー語を学びたいければ、お年寄りについて教わる必要があります。しかしそんなことはしたことがないからと教えたがらない人が多く、教えてくれる人を探すのはなかなか難しいのです。その点私は運がよくて、到着後村に一軒だけあるロッジに泊まった次の日に、隣に住むおばあさん、アーナ・ミニ（エスキモー語でミニおばあさん）を紹介されて、事情を話したら、あっさり引き受けてくれました。こうして私のエスキモー語の調査は順調にスタートしました。

村に滞在して調査を進めるにつれて、私はアーナに教わることが出来ることになったことが幸運だったことが分かってきました。というのは、エスキモー語を話せる人のほとんどがエスキモー語の文字を知らない中、アーナは村でほとんどただひとりの、エスキモー語の正書法を知っている人だったのです。これは、アーナが若い頃村の小中学校でエスキモー語の先生をしていたからでした。そのおかげで、聞き取れない単語などは綴りを言ってもらえることが出来たので、私の調査はかなり順調でした。

このような調査をアンブラーで三回行って修士課程を修了した後、私はエスキモー語研究の本場で勉強したくなり、アラスカ大学に留学しました。

アラスカ大学のラスムソン図書館は北方原住民の諸言語の資料が豊富です。これらの言語について書かれた本や論文のみならず、これらの言語で書かれた本、多くは子供向けのブックレットのようなものですが、そのようなものがたくさんあります。私はある時、興味半分、研究の資料に使う目的半分で、エスキモー語の資料の蔵書を調べてみました。すると、その中にアーナの本がたくさん見つかったのです！アーナは、昔話を集めたものやエスキモーの習わしを説明したものなど、十冊ほどエスキモー語で本を出していました。多くは三、四十ページのブックレットですが、なかには三百ページほどのハードカバーの立派な本も三冊ありました。こうして、私は大学の図書館で思いもかけずアーナに“再会”することになりました。本人からはそんな本を出していたなんて話を聞いたことがありませんでしたから、見つけた時には驚きました。

あとでアンブラーに行った時にアーナにそのことを聞くと、「若い頃ちょっとそんなこともやってたのよ」と笑っていました。村でアーナはみんなから尊敬されていますが、それはトナカイを捌くのが上手だとか魚の干物を作るのが上手だとかの理由によるもので、何冊も著書があるからではありません。それでも私は研究者であるせいか、このことでいっそうアーナに敬意を抱くようになり、またそうとは知らずにエスキモー語研究のいわば先覚に教わることが出来たことを幸運に思うようになりました。

（経済学部マーケティング学科准教授 言語学）

「学びの志」をくれた、書物のない図書館

猿 橋 順 子

SARUHASHI Junko

今から15年ほど前、私が大学4年生の時、大学生活の記念にトルコ、ギリシャを旅した。イスタンブールに入り、アテネを出る航空券を用意した他は、行き先も宿泊先も決めない、寝袋を携行するバックパックの旅だった。沢木耕太郎氏の『深夜特急』（新潮社）に触発され、『地球の歩き方』（ダイヤモンド社）を頼りに旅に出る若者のひとりである。

イスタンブールから旅を始めるなり、ふたつの出来事に衝撃を受けた。ひとつは自分たちがトルコに入国したのが、イスラム教の断食月、ラマダーンの最中だったことである。恥ずかしながら旧暦をひもとくことなく計画を立ててしまったのである。

田舎に行けば行くほど、レストランといえども日中は食事を用意していないところが多くなる。それでも、はるばる日本から来た若者に「この程度しか用意できないけれど」と簡単な食事を整えてくれる。感謝いっぱいなのだが、空腹の子どもがじっと見つめる前で食べるのは、なんとも気が引けた。そうかと思うと、「アッラーが旅人を連れてきてくれたから」と断食を中断して盛大なパーティーになってしまうこともあった。

ふたつめは、時代はまさにチェチェン紛争（1994～1996）が始まろうとしていたときであった。私たちと同じくらいの年齢の若者たちと雑談をしていて、話題はやがてチェチェンにおよんだ。トルコ人の若者のひとりが、「傭兵に志願して戦地に行くつもりだ。ここでは働き口がないから」と言った。彼が本当に戦地に行ったのかどうかは分からない。それで

も、自分自身が、これまで戦争や紛争を、遠い世界のこととしか受けとめていなかったことに気づき、愕然とした。

バスで旅を続け、哲学者ヘラクレイトスの出身地として知られるエフェソス（Efesus）遺跡を訪れた。ここにはアレキサンドリア、ベルガマと並ぶ世界三大図書館のひとつ、ケルスス図書館（The Library of Celsus）がある。ローマの執政官、ケルススを称え、彼の息子が建造したとされている（A.D.135年に完成）。当時は12,000冊～15,000冊の書物を所蔵していたという。

外壁に美しい装飾が施されたケルスス図書館の荘厳さは、見る者を魅了する。遺跡を巡るペースがたまたま同じだった、同世代のカナダ女性が、「この図書館が建てられたころ、あなたの国の歴史には何があった？」と尋ねてきた。歴史に自信のない私は、返答に窮し、「さあ、歴史に詳しくないの。農耕社会だと思うけど……」と答えた。すると、彼女も「私も歴史は詳しくないわ。でも、少なくともこんなに素晴らしい図書館はなかったと思う」とため息交じりに言う。思わず二人で顔を合わせて笑った。

異郷の地、トルコで、2000年近い時を経た書物のない図書館の前で、カナダ人女性に問われたその問いは、しかし、その後も何度も私の中でこだました。大学4年の秋、卒業を目前としながら、「もっと日本のこと、世界のことを知りたい」と改めて志を立てた瞬間であった。

（国際政治経済学部准教授 社会言語学）

様々な出会いの場としての図書館

外 林 秀 之

SOTOBAYASHI Hideyuki

私が学生であった時代には、勉強や研究をしている際に、何かを調べたいときや知る必要があるときには、何はともあれ図書館に行き、関連のありそうな書籍・文献・学术论文を調査したものです。しかしながら、情報通信技術（ICT）の進展に伴い、ここ数年を見るだけでも図書館のあり方、あるいはサービスの提供の仕方が大きく変わりつつあることを実感します。

経済成長の歴史を振り返ると、農業革命を契機とした17-18世紀にかけての「農業の時代」、二度の産業革命を契機とした18-20世紀にかけての「工業の時代」を経て、21世紀に入った今日では、ICTの発達を契機とした「情報・知識の時代」となりつつあると指摘されています。そのような社会環境の変化の中、図書館では、従来からの高度専門的なレファレンスサービスの提供に加えて、図書館の電子化によるサービスの多様化が検討されていると耳にする機会が増えてきました。

具体的な例を挙げてみます。従来は研究成果を論文にまとめる際には、図書館に出向いて、学会論文誌などの索引を学会ごとや年度ごとにページをめくりつつ検索し、必要な箇所をコピーして関連の情報を集めたものです。一方今では、例えば青山学院大学図書館のホームページにアクセスすると、「電子ジャーナルを探す」というサービスが提供されており、文字通り膨大な情報を有する様々なデータベース・e-book・学会論文誌などにアクセスすることができます。これにより、図書館に足を運ばずとも、昼夜を問わず様々な情報が検索

可能で、瞬時に必要な情報や文献を入手できます。最も大切なオリジナルのアイデアとそれに伴うデータを有しているのであれば、たとえ出張先や通勤途中の電車の中であっても、これらの図書館サービスにアクセスしながら、研究論文を執筆することが可能です。例としては研究論文のことを挙げましたが、学生が勉強を進める際やレポートをまとめる時にも同じことが当てはまります。これはテレワークの考え方にも通じますが、ICTが普及すると、これまでのように時間や場所が制限となる事はなく、多様な情報・知識をいかに利用するかが決定的に重要な意味を持つようになってきてきます。

このように情報・知識活用の水先案内人の役割を果たしている図書館の存在感はますます大きくなっています。時間や場所に制約されずに図書館のサービスが受けられる時代であるからこそ、何はともあれ図書館に足を運びたいというのは、少々逆説的でしょうか。図書館に行くと様々な分野の書籍が並んでおり、すぐに手にすることができます。自分の当初の目的ではなかったコーナーに足を踏み入れると、自分が普段関わっていることが如何に狭い領域であるか、世の中はなんて豊かなのだらうと感じずにはいられません。様々な出会いの場としての図書館をますます活用したいと思い、今でもかなりの時間を図書館で過ごすことが多いです。

（理工学部電気電子工学科准教授

情報通信、テラヘルツ波、光デバイス、光工学）

『図書館と漫画』

福田 亘 孝

FUKUDA Nobutaka

明治大学にマンガとサブカルチャーの専門図書館がオープンするそうである。この話を聞いてイギリス人の友人のことを思い出した。その友人は「日本の若者文化と漫画」をテーマにして学位論文を書いている、日本で何度もフィールドワークをやっていた。

当時、まだまだマイナーであった日本の漫画を論文の研究テーマにしていることに興味がわいたので、その友人に「なぜ、日本の漫画を研究テーマに選んだのか？」と理由を聞いてみたことがある。友人は「日本の漫画、コミックは世界に類を見ないほどジャンルが広く、ストーリーや登場人物のおもしろさ、絵の美しさは世界一だ。ここに惹かれて私は研究テーマにした」と教えてくれた。

確かに言われてみると、1990年代中頃まで、欧米のコミックは日本のものと比べて、明らかに遜色があった。ストーリーはよく言えば単純、悪く言えば幼稚であった。絵にいたっては日本の「へたうま」漫画とは比べものにならないくらい本当に稚拙だった。さらに、日本のコミックが「源氏物語」からSF・ファンタジー、さらには経済学の入門書までの幅広いテーマを題材にしているのに対して、欧米のコミックはバットマンやスーパーマンに見られるように、勧善懲悪主義の話がほとんどで、シェークスピアをモチーフにした漫画など想像すらできなかった。漫画は小さい子どものもの、あるいは、絵本の一種というの

が一般的な見方であった。

こうした状況であったから大都市の大きな本屋でも漫画を手に入れるのが難しかったし、ましてや図書館に所蔵されている可能性は無きに等しかった。いわば、図書館と漫画はもともと遠い関係にあった。件の友人は、何度も日本に行って漫画専門の図書館や出版社を回って論文の資料を集めていた。

しかし、近年、日本の漫画はヨーロッパでは広く社会的認知を受けるようになっている。大きな本屋には「Graphic Novels」のコーナーが設けられ、「スラムダンク」を始めとする日本の漫画の翻訳が所狭しと並べられている。また、漫画やコミックといった日本のサブカルチャー関連の資料を収集しはじめる大学も、数はそれほど多くはないが出始めている。さらには、シェークスピアなどの西洋の古典をモチーフにした漫画も出版されてきている。図書館と漫画は、嘗ての遠い関係から近くて親しい関係に変わりつつあるようである。こんな状況を見たら、友人は何というだろうか？私も、これから益々、漫画やコミックに図書館で出会うことを楽しみにしている。

(社会情報学部社会情報学科教授 社会学)

映画『Love Letter』の図書室

入不二 基義

IRIFUJI Motoyoshi

映画『Love Letter』（岩井俊二監督・中山美穂主演）では、図書室は重要な場所である。同姓同名（ふじ いいつき藤井樹）の男子と女子―柏原崇と酒井美紀が演じる―が、中学に入って同じクラスになり、周囲から冷やかされつつ、カップルで図書委員にさせられてしまう。

少年・藤井樹は、図書委員の仕事をほとんどしない。誰も借りていない本を借りて、まささらな図書カードに「藤井樹」という名前を書き込んでいく遊び（いたずら）に興じている。「藤井樹ストレートフラッシュ」と言って、5枚の図書カードをトランプのように広げて見せる。少女・藤井樹は、「ばっかじゃない」と呆れて、冷ややかな視線を送る。

これは、忘れられていた思い出だった。大人になった藤井樹（女）は、ある事をきっかけに、少しずつ思い出していく。渡辺博子という女性が、山で遭難して亡くなった恋人（青年・藤井樹）宛に書いた「届かないはずのラブレター」が、藤井樹（女）へ「誤って」届いてしまう。渡辺博子と藤井樹（女）の不思議な文通が始まり、渡辺博子の求めに応じて語りつつ、藤井樹（女）は自分の中学時代を再発見していく。同姓同名の少年のことを思い出していく藤井樹と、亡くなった恋人の少年時代を初めて知る渡辺博子。二人は、双子のようにそっくりで、中山美穂が一人で二役を演じている。

ところで、少年が図書カードに書いていた「藤井樹」は、ほんとうに彼自身の名前だったのだろうか。藤井樹（女）の名前だったのではないか。さらに、少女が少年に向ける視線や苛立ちや微笑みには、淡い恋心が透けて見えないだろうか。

大人になった藤井樹（女）は、母校を訪ね

たときに、あの図書室で後輩の少女たちと対面する。少女たちは、図書カードの「藤井樹」さがしゲームについて語ってくれる（すでに87枚見つけたという）。少女たちは、その名前を書いたのが男子だったと聞いて、もう「恋」の匂いを嗅ぎつけている。もちろん藤井樹（女）は、「それは私の名前ではなくて…」と言って否定しようとするけれども。

中学三年の卒業間近だった一月。少女・藤井樹は、お父さんが亡くなって、学校を休んでいる。そこへ少年・藤井樹が訪ねてきて、借りていた本が返せなくなったからと言って、一冊の本『失われた時を求めて』を彼女に預ける。少女・藤井樹は、一週間遅れて登校して、少年・藤井樹が急に転校したことを初めて知る。預かった本を図書室の書架に戻そうとして、いったん手が止まり、図書カードを確認する。やはり、「藤井樹」と書かれていた。この卒業間際の出来事が、少年・藤井樹との最後の思い出であると、渡辺博子への手紙に書く。

しかし、ほんとうは「最後」ではなかった。十年の時を経て、そして図書室を経由して、失われていた過去が戻ってくる。「藤井樹さがしゲーム」を続けていた後輩の少女たちは、『失われた時を求めて』の図書カードの、さらにその裏に「証拠」を見つけて、先輩の藤井樹に届けにやって来る。図書カードの裏にあったのは……。藤井樹は、まるで少女に戻ったかのように恥じらいながら、その本を優しく抱える。これはもう、渡辺博子には伝えられない、彼女だけの思い出である。図書室は、届かないはずのものが届く所、失われていた過去と出会う場だったのである。

（教育人間科学部心理学科教授 哲学）

大学図書館は知のシンボル

小 西 範 幸

KONISHI Noriyuki

図書館は大学の知のシンボルであり、これから紹介する2つの大学では、図書館を中心とした大学すべてのアカデミックな雰囲気に「ここで勉強したい!」という衝動にかりたてられたのを思い出す。

(1) イリノイ大学

米国のイリノイ大学 (University of Illinois at Urbana-Champaign) を初めて訪れたのは、今から19年前のことである。アメリカ会計学会 (AAA) に出席した後に立ち寄ったのがイリノイ大学との最初の出会であった。それは、国際会計教育研究センター (CIERA) の当時の所長であるジンマーマン (Vernon K. Zimmerman) 教授への面会が目的であった。

イリノイ大学は、会計学研究に関しての、当時リーディング・ユニバシティであり、米国公認会計士試験合格者数は常にトップの座を占めていることでも有名であった。

(2) 5つの図書館

ジンマーマン教授は親切にもキャンパスを案内してくださった。まず、最初に案内して頂いたのが Main Library であった。写真からも分かるとおり、とても重厚な建物であり、私がそれまで知っていた日本の大学図書館にはない権威を感じた。「会計学に関する文献で、ここに所蔵して



ないものはないだろう」というお話を伺ったのを思い出す。

イリノイ大学には、その他にも4つの図書館があり、それは、Undergraduate Library,

Grainger Engineering Library, Isaac Funk Family Library, Law School Library である。1つの大学に5つもの図書館があること、それも1つ1つがとても充実していることに驚いた。

(3) 図書館での驚き

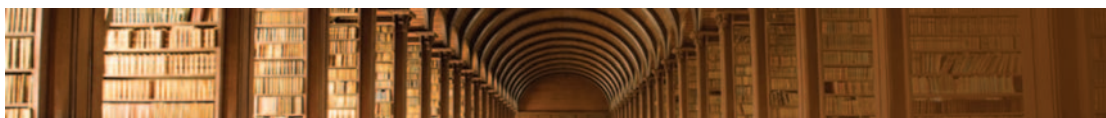
1998年の滞在時には、身を寄せていた寮に近かったこともあり、Grainger Engineering Library を自習室としてよく利用した。講義で知り合った大学院生に案内されたのがこの図書館との初めての出会いであった。院生たちとは、講義後にグループ・ミーティング室に入りワイワイ・ガヤガヤとレポート作成を手伝ったりもした。パソコンを持ち込んでイーサネット接続さえすれば自由にインターネットも利用でき、グループ学習に最適であった。

夕食後の午後8時頃には図書館が再び混みあい、毎日課せられるハードなレポートを完成させるため、午前零時頃まで熱心に勉強している学生の姿に驚き、それに対応するために図書館が深夜の2時頃まで開館していることに驚いた。レポート作成にはさまざまな文献が必要なため図書館での勉強は必要不可欠であった。

(4) ダブリン大学・The Old Library

ダブリン大学トリニティ・カレッジ (University of Dublin, Trinity College) には半年ほど滞在した。この大学の歴史はたいへん古く、1592年にエリザベス一世が創設したアイルランド最古の総合大学である。4つある図書館のうちの1つが有名な The Old Library であり、キリスト教界の至宝であるケルズの書『ラテン語福音書 (The Book of Kells)』(彩色写本、西暦800年) を所蔵している。にぶい光をたたえた古書が高い天井まで配架され、西洋の2千余年の知的伝統が集約されており、伝統と格式を感じずにはいられなかった。

(会計プロフェッション研究科教授 国際財務報告会計論)



The Old Library

CiNii (サイニィ) NII 論文情報ナビゲータ

を使って日本語論文を探そう

CiNii (サイニィ) というデータベースを知っていますか？図書館のオリエンテーションでは、日本国内で発行された論文を探すツールの基本として、度々紹介しています。レファレンスカウンターで「日本語で書かれた論文を読みたい」「〇〇という雑誌に載っている論文を探している」という質問を受けたときも、このCiNiiで検索しています。「ちょうど日本語論文を探していた！」という人は、この機会に一度検索してみてください。

■CiNii (サイニィ) の特徴

- ・ 国立情報学研究所 (NII) が提供する、日本の学術論文*を中心とした論文情報を収録した無料検索サイト
- ・ 学協会刊行物、大学の研究紀要など学術雑誌に掲載された論文
- ・ 約 1,200 万件の学術論文を収録 (うち無料で本文閲覧できる論文 = 320 万件)
- ・ 検索した論文の参考文献と被引用文献を表示、引用関係が分かる

■図書館ホームページからの入口は？

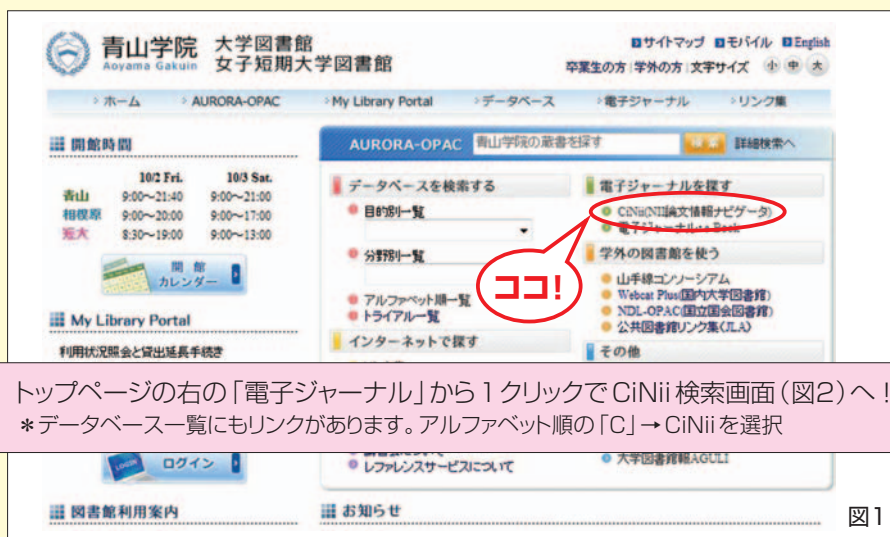


図1

■CiNiiトップページの画面構成

①キーワード入力

「論文名」「著者名」「著者所属」「刊行物名」「ISSN」「巻」「号」「ページ」「出版者」「抄録」「論文キーワード」が検索対象です。

②詳細検索への切り替え

上記検索対象の複数の項目を掛け合わせて検索できます。

③本文収録の有無を選択

「すべて」= 全論文
「本文ありor 連携サービスへのリンク」= 本文収録がある、または関連サイトへのナビゲーションがある

④CiNiiに本文収録された刊行物のタイトルなどからブラウズ

目的の雑誌に早く辿りつけます。



図2

＜実際に検索してみましょう＞

トップページ (簡易検索画面) の検索ボックスに、「産学連携」と入力。

本文収録の有無は限定せず、既定値の「すべて」のままにします。⇒ **論文検索** をクリック！

■ 検索結果の見方

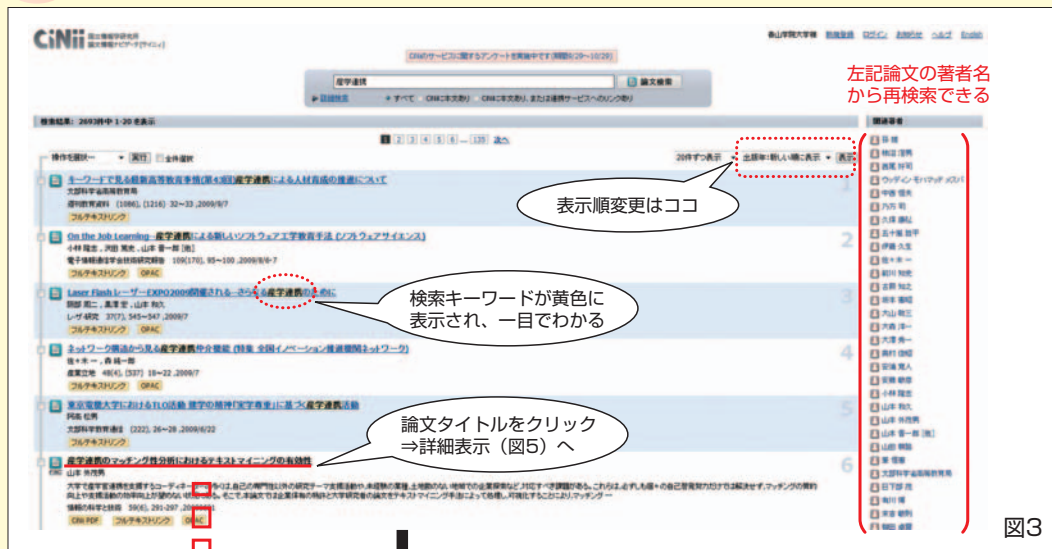


図3

論文タイトル
をクリック

< 拡大図 >

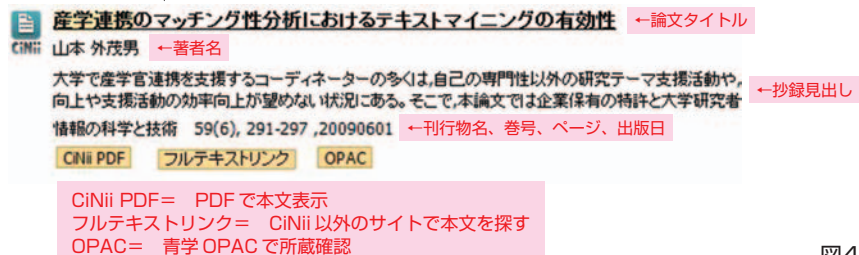


図4



図5

< CiNii PDF フルテキスト表示の注意点 >

一部の論文でID/PWを求められることがあります。その場合、A:学内環境であればPDFが表示される、B:学内環境であってもPDFが表示されない、の2パターンがあります。自宅でアクセスできない時は、学内で試してください。Bの場合は、レファレンスカウンターにご相談ください。

■ 国立情報学研究所 (NII) 作成の「クイックガイド」↓↓↓

http://ci.nii.ac.jp/info/ja/manual_outline_quickguide.pdf

本館参考係

ガイダンスのお知らせ

本館 青山キャンパス

◆秋季データベース講習会

各データベースの提供元から講師を招いて、データベースの操作方法、検索のコツなどをご紹介します。学生、教職員はどなたでも参加できます。開始時刻までに集合場所へお越しください。

データベース講習会Part.2 ～英語論文の検索～			
EBSCOhost	11/5(木)	16：30～17：30	集合場所：図書館1Fマルチメディア室
ProQuest Central	11/6(金)		
Web of Science	11/10(火)		
データベース講習会Part.3 ～法律情報の検索～			
D1-Law.com	11/12(木)	16：30～17：30	集合場所：図書館1Fマルチメディア室
LexisNexis at Lexis.com	11/13(金)		

* Part.1は10月に終了しました

万代記念図書館 相模原キャンパス

「レポート・プレゼンに役立つ情報探索ナビ」

レポート作成やプレゼンテーションに役立つ情報収集ツールや文献探索方法について、下記の5つのテーマごとに案内します。所要時間は45～60分です。

- ・ 基本的な情報の探し方 百科事典や辞書類をまとめて検索できるデータベースや、論文検索データベースの検索方法など基本的な文献の探し方を説明します。
- ・ 英語文献の探し方 学内にある洋書の検索方法や、データベースを使った英字新聞や論文記事の探し方について説明します。
- ・ 企業情報の探し方 事業内容や財務データなど、あらゆる企業情報が入手できるデータベースの検索方法を中心に、自宅からのアクセス方法なども説明します。
- ・ 新聞記事の探し方 新聞記事が検索できるデータベースの紹介や、検索方法、新聞縮刷版の利用など新聞記事の上手な探し方を説明します。
- ・ 統計データの探し方 レポート作成に役立つ統計資料の紹介、各省庁のホームページや統計サイトなどからの統計データ入手方法について説明します。

会場：万代記念図書館3階グループ学習室A

	11:00～	13:00～	15:00～	17:00～
11月9日(月)		基本的な情報	英語文献	企業情報
11月10日(火)		統計データ	新聞記事	基本的な情報
11月11日(水)	英語文献	企業情報	基本的な情報	
11月12日(木)		統計データ	基本的な情報	新聞記事
11月13日(金)		基本的な情報	統計データ	企業情報
11月14日(土)	新聞記事	企業情報		

※ 各回、定員8名です。2階レファレンスカウンターにお申し込みください。定員になり次第、締め切ります。

リサイクル・ブック・フェアのお知らせ

図書館で不要になった本および雑誌を利用者に無料で提供します。

青 山 キャンパス	開催日時	12月3日(木)～12月9日(水) 平日/9:30～21:00 土/9:30～20:30 日/12:30～18:30
	会 場	図書館3階グループ閲覧室B
相 模 原 キャンパス	開催日時	12月16日(水)～12月18日(金) 9:30～19:30
	会 場	図書館1階点字用ブース

編集後記

今号では、テーマ「図書館での出会い」から執筆者の方々が自由に発想された、読みごたえのあるエッセイが集まりました。いろいろな「出会い」を楽しく読んでいただければ幸いです。みなさんも図書館に足を運んで自分だけの「出会い」を見つけられては？
(倉松 中)

青山学院スクール・モットー 地の塩、世の光 The Salt of the Earth, The Light of the World

青山学院大学図書館報「AGULI」第86号 2009年11月1日発行

編 集 青山学院大学図書館報編集委員会・大学図書館広報担当 TEL.03-3499-1402 FAX.03-3407-4472

発 行 青山学院大学図書館 〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25 <http://www.agulin.aoyama.jp/>